

京都市大學經濟學會 經濟論叢

第二十卷 第三號

大正十三年三月一日發行

論叢

地方所得稅と他地方交渉問題……………法學博士 神戸 正雄
唯物史觀公式中の一句に就て……………法學博士 河上 肇
獨逸流通稅の變革……………法學博士 小川郷太郎

時論

取引所改善の要點……………法學博士 戸田 海市
注意すべき小作人問題……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

生計費研究法を論ず……………法學博士 森本 厚吉
所得分配統計……………法學士 汐見 三郎

雜錄

ブレーフエーアの統計要覽……………法學博士 財部 靜治
ビュツビャー文庫……………法學博士 小川郷太郎
自由貨幣運動……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

生計費研究法を論ず

〔『京都市小學校教員生計調査』批評〕

森 本 厚 吉

法學士沙見三郎氏が自著論文『生計調査を論ず（京都市小學校教員生計調査）』を京都帝國大學經濟學會經濟論叢第十卷第六號及び、第十二卷第一號に連載し、其緒言に於て私が約二年前に社會政策學會大會で發表した研究の一部を批評し、其本論に於て生計費研究の範を示されました。私は其厚意を厚く感謝致しましたが、著者から其論叢の寄贈を受けた時は丁度昨年末旅行の前日で頗る多忙でありましたから、大急ぎで此論文の終りに附記してある様なお答をして全文を同論叢で公表される様に頼みました。然るに締切期日後であつたこの爲めに、次號に更に詳細のものを書く様に著者から親切な返事が参つたのです。處で該批評を精讀して見ますと私の論旨の根本に對しては餘り主要でないのみならず、其問題に觸れる他の研究を近々纏めて發表する事になつて居ますから、寧ろ一つの獨立したものとして、生計費研究法に關する所見を述べ、併せて著者の研究を批評した方が、學界の爲めに益する事もあらうかと思ひ此文を草したのであります。隨て獨立の論文としては、色々不備な點のある事をお断りして置きます。

一 序言（消費經濟研究の發達に就いて）

斷片的の經濟學說が統一され一つの獨立した科學として經濟學が生れ出たのは十八世紀の後

半で、クエネーのタブローエコノミー(一七五八年)やスミスの富國論(一七七六年)等は其代表的著書として重きをなして居るのである。

併し其當時の學説は主として生産問題としての富の性質及原因に關して論じたものであつたら、今日から見ると種々の點で不完全なものである。漸く十九世紀の初期に至つてマルサスの人口論(一七九八年)やリカードの經濟原論(一八一七年)等が公にされてスミスが十分に注意を拂はなかつた分配論を重要な經濟問題として論究し、生産と分配との二大方面から經濟學説が論議され、茲に内容が餘程充實されて英國派經濟學説が個人主義の上に樹立さるゝに至つた。

マルサスはスミスを批評し「彼が研究の目的としたのは富の性質及原因であるが彼は其他に猶一層趣味の多い別の研究のある事に注意をして居なかつた、夫れは何れの國でも人口の最多數を占めて居る下流階級の幸福を支配する要因に就いての研究である。即ち分配問題として民福増進に關する原因を探究しなければならぬ」その意を示して居つたのである。

十九世紀前半に英國派經濟學説が全盛を極めた後を受けて歴史派の學説が其後半に至つて勢力を得る様になり數種の經濟原論が出版さるゝに至つた。而してロツシエルが千八百五十四年に代表的「經濟學の出發點も其目的點も共に人である」¹⁾と云ふ根本義に重きを置く様になり、次第に資本主義に囚はれた從來の學説は餘りに生産に重きを置いて人其ものを恰も生産の道具の如くに取扱つて居る事の非を悟り、社會の經濟的進歩の爲めには生産及分配と共に生産の最終目的である消費を重要視すべきを説き始めたのである。オーストリヤ學派や社會主義系統の學説皆經濟學

1) Roscher, Volkswirtschaftslehre, B. I, S. 1.

研究の最後の目標としてはセイリグマンの言葉を藉りて言へば「人を高價に物を安價にする事」²⁾にある事を主張したり、或はバロックの如く經濟學は「生活を營む (Securing a living) 爲めにする人の活動を研究する學問である」³⁾と云ふて居るが如く、凡て人又は人の生活に重きを置く様な機運に向つて來た。

斯くの如くにして消費論は少くも理論上からは生産や分配論と共に頗る重要な位地を占むる様になつた、而して二十世紀に入つてからは一層此の方面に堅實なる進歩を示し最近に至つては勞働非商品説の如きが一般に認められ、人類生活の充實を計り其能力を増大にするには消費行爲を正當にしなければならぬ事が益々重ぜらるゝに至つた、茲に於て消費問題は從來の如く常識論に一任すべきものでなく大いに學術的研究を行ふ可き必要もあれば又餘地も存する事が認めらるゝに至つたのである。

實際問題として考へても今日の經濟を昔のものに較べるとスマートの言つて居る通り More wealth, more mouth, more hungry である事が特徴である。故に徹底的に經濟學の進歩を來すにはどうしても生産 (wealth)、分配 (mouth)、及消費 (hungry) の三方面より研究を進めなければならぬ、消費部門が生産(交換)や分配の部門と同等の地位又は夫れ以上に立ちて其原理が明かになり以て經濟學が眞に完成の域に達し一層實社會と密接な關係を有する様になる事が出来る。消費部門の重きをなして居ない經濟學は未だ不完全なものである。幸に我國に於ても近來此方面の研究の必要が一般に認めらるゝ様になつたが、其研究の實は未だ舉つて居ない。夫れで私は思ふ、マ

2) Seligman, Principles, p. 15.
3) Bullock, Economics, p. 79.
4) Smart, Second thought, p. 29.

ルサスが十八世紀の幕が閉ぢんとした時に、スミスが單に富の生産のみに重きを置いたのは誤りで國民全體の幸福を計るが爲めに分配論の研究が必要である事を論じたのと同様に、二十世紀の今日では其考が一層進歩して分配論の他に更に消費論の研究が伴はなければ經濟學の目的を達する事が出来ない。

二 生計費研究の目的に就いて

上述の如き經過によりて發達した消費經濟は如何なる方面に研究を進むべきかに就いては茲に論す可き時を持たないが、唯生活問題は其最も重要なものの一つである事だけは記憶しなければならぬ。今日普通に消費問題として取扱つて居るのは大別すると、貨幣の消費及富の使用の二つであつて其目標は生活の充實即ち向上にあるのである。而して此目標に近づく爲めに現在行はれて居る消費經濟の研究は主として貨幣の消費に止まつて居つて未だ富の使用に就いては餘り問題になつて居ない。勿論此兩者は密接な關係を有して居るから富の使用論は貨幣の消費論が或る程度迄進歩した時に初めて學術的に研究し得るのである。従つて消費經濟の今日の進歩の程度では生活を支ふる爲の所得、即ち一家の收入と其支出に關する事を消費問題の基調とし是れを總體的に生計費論として今日其研究を進めて居るのは當然の事である。

斯く觀じ來ると生計費研究の目的は何であるかと云ふ事が自然に解し得るであらう、即ち個人の生活を經濟的に充實する事によりて其生活能力を大にし引いて國民全體の福利を増進し得る事

5) Smart, p. 124.

に存するので此目的を目標として生計費問題を研究すべきである。而して此目的を達する爲めには先づ現代經濟生活に關する真相を明かにしなければならぬ。然るに文明人の生活は家計によりて整理されるのであるから茲に家計調査の研究が必要になる。我國に於ても近來少しづつ此調査が行はるゝ様になつたのは喜ばしき事であるが、其調査は研究の目的を達する一手段であつて調査其物だけに重きを置き生活に關する事實を列記したゞけで能事終れりと考へるのは大なる誤りである。苟も一個の學者者として立つて居る以上は調査の結果として得たる事實を研究の資料に供して以て生計費研究の最後の目的を成就しなければならぬ。

統計學上の見地からは生計費調査法其物も學術的價值を大に有するものであるが、經濟學上の見地から考ふると調査其物は研究を可能にすべき手段としての價值を有するに過ぎない。換言すれば生計費調査の如きは普通官公吏員等の行ふべきもので私共學徒の本務は先づ正當なる研究方を示す事と其結果を利用して研究の最後の目的を成就する事にあるのである。勿論我國現今の事情では止むを得ずして私共自身が進んで調査を行ひ資料の蒐集を自ら行ふ事を必要とする場合が多いのであるが、單に其調査によりて事實を確定したゞけでなく、更に夫れ以上の努力を惜んではならぬ。要するに調査は目的を達する一手段であるから調査の爲めに目的を犠牲に供するが如きは大いに戒むべきである。

生計費研究の發達及其方法等に關しては別に論じたのであるから、茲に繰り返へさない。併し特に注意すべきは生計問題研究法は其人、場所、時等の事情によりて大いに變化するものである

から我國で生計費調査を行はんとすれば出来るだけ諸外國及既往の調査事實を調べ夫々其長を探りて我國の事情と研究者の力量に應じたる方法を探る可きである、例へば教員の生計調査を行はんとすれば少くも National Education Association: Teachers' Salaries and Cost of Living の如きは如何に複雑なる著述であつても豫め之を精讀して貴重なる暗示を受けなければならぬことは云ふ迄も無い事である。

近來行はるゝ此種の研究に於て以上論述した様な諸點が等閑に附せられたものがあるのは大いに警戒を要する事と思ふ。斯る研究は單に精力の空費であるのみならず實生活に密接なる關係を有すべき消費經濟論に於て其理論と實生活を益々沒交渉ならしめ學術進歩に妨害を爲す場合が少くない。

斯くの如く考へて居る時に、私は汐見學士の親切によりて其「生計調査を論ず」を一讀した、何しろ我國刻下の急務である小學教員問題の解決に向つて根本的に必要なる生計調査を行はれたのであるから大なる期待を以て是を讀んだのである。申す迄もなく著者の學究に對して忠實なる態度と夫れが爲に惜まれなかつた莫大なる努力に對しては充分に敬意を表するのであるが、不幸にして著者が採られた研究の方法及其結果等に關する重要な諸點に於て私は全然賛意を表する事が出来ないものがある、従つてかゝる調査研究は如何に勞力を要したものであつても、更に異つたる方法によつて再調査を行ふのでなければ其學問上の價值は殆ど皆無であるまいかと疑はざるを得ない。

私は一方、眞面目な研究者の努力に對しては少なからぬ尊敬を拂ひ、他方、自分の非才を自覺して居るが故に、萬已むを得ない場合でなければ、批評文に筆を染むる事を避けて居る。然るに今敢て著者の論説を批評せざるを得ないのは、私情に於ては忍びぬのであるが、著者自身の希望もあり、又私の學界に於ける實務の一つとも考へるが爲めに、以下數項に分ちて、之れを論述する次第である。若し不幸にして、著者の誠意を傷けない様にこの私の望みが充分に達し得られなかつたらば、夫れは私の拙い文筆の罪であるから其無禮を謝罪するに、何の躊躇もしないのである。

三 調査の研究と方法

先づ第一に考へなければならぬ事は、調査の方法と結果との關係である。複雑した生活狀態の眞相を明かにするには、其研究法が宜しきを得て居なければならぬ。けれども結果は方法よりも重んずべきものである事は、言ふまでもない。然るに汐見學士は其反對に「結果よりも方法を重する學徒の立場」云々と云つて居られる。今日生計に關する問題が多く時代後れの囚れた常識又は想像に基いて非科學的に論ぜられて居る時に著者がかゝる警告を與へられた其精神に於ては同意するものであるが、實際に於て著者のなされた研究の方法と結果を見て私は失望したのである。方法の大切なるは正當な結果を得んが爲めである。學生に研究方法を教へる目的の演習室に於ける議論なら別でもあらうが、苟も「京都市小學校教員千二百の諸氏の誠意の結晶に出づ」⁷⁾と

まで自重された一論文を公にさるゝに當り、其結果に重きを置かず其方法に重きを置くを公言せらるゝのは學徒とし甚だ無責任な事である。私共が何か研究にこり懸る時は、先づ第一に其目標を定め其目的を明かにして次に適當なる學術的方法を定め以て正當なる結果を求む可きである、故に「結果よりも方法を重する」のではなくして結果を重するが爲めに方法を重する必要があるのである。若し此本末を誤つたならば後論するが如きデイレンマに陥るのは止を得ぬ次第である、今著者が研究の結果として擧げらるゝものを見るに次の様な根本的缺點が存在して居る。

(一) 生計調査の目的の一は家計の收支の關係を明かにする事である、著者自身も「一體生計調査は其沿革上各人の消費狀態を明かにし以て其収入と支出との關係を示すのを目的として居る」と云て居られる。然るに著者の研究の結果では其収入と支出との關係を明かにして居るとは云へない、即ち支出は収入に比して非常に多い。例は中立級に就いて見るに支出の總計は一ヶ月百〇四圓であるに比して収入の總計は僅かに其半數に近い六十四圓に過ぎず其差額實に四十圓收入の六割三分に當つて居る、第九級に至つては其差七十二圓五十錢收入の七割四分である。せめて一二割であるとか又は單に一二の階級だけに表はれた事實であるならば兎も角であるが、小學教員の經濟的地位から考へて四十圓、七十圓と云ふ大穴が各階級に悉く表はれて居る事は實に重大なる事實である。夫れで著者自身も「第四表の結果を見て異様に感ずるのは收入に對して支出が非常に多く従つて不足額が多額に上つて居る事實である」と云つて居らるゝが其理由の説明は實に簡單なものである、曰く「是れ一方増俸問題と關聯せし調査であつたから無意識の内に支出

* 編輯委員：原稿には(一)有りて(二)以下無し、暫く之に従ふ。
9) 754頁 10) 167頁

の數字が誇張せられたのにもよるが、他方收入としては自己の收入のみを掲げ家族の收入私の收入を除外した爲めでもある」¹¹⁾是れでは學術的に收支の關係を明かにす可き目的は達せられて居ないから何の爲めに研究されたのであるか解されない、當然明白にすべき其不足の數字の性質を明かにする事が出来ない様な結果を來した研究法には必ず不備の點があるのであるから更に何等かの手段を講ずるか或は再調査をして其目的を達す可きは研究者の當然の責任であるにも拘らず、夫れに對し「不足の數字には餘りに多くの學問的興味を有せず」¹²⁾と云ふて逃げらるゝのは學者として餘りに卑怯ではあるまいか、斯くの如く折角の努力に依りて出來た結果に於て甚だしき缺點が存するに至つた理由の主なるものは、著者が結果よりも大切であると迄云はれた調査方法其物と其整理方法とに於て次に述べる様な誤つた出發點を有して居るからである。

四 調査の主體に就いて

著者は「私は本調査の長所として先づ確實性を挙げたいのである」¹³⁾と云はるゝのであるが私は結果から見ると其反對に本調査は甚だ不確實なるものであると思ふ。如何となれば著者が確實であるとの斷定は「本調査の主體は凡て皆現に教職にある人のみであつて其職務上の關係よりするも虚言を云へない譯である」¹⁴⁾との理由であるが調査の結果を見ると却て其教員達は從來生計調査の主體となつた人に較べて未曾有の大虚言者であつた事を示して居る、即ち千二百名の教員は第一級より第九級に至る迄悉く其収入額と支出額の相異が著しくあるのは著者自身の云はるゝ通り

11) 167頁

12) 167頁

13) 157頁

14) 157頁

「是れ一方増俸問題と關聯せし調査であつたから無意識の内に誇張せられたのである」か或は副収入を計算しなかつた爲であるか何れかでなければならぬ。若し無意識に誇張されたのであるから虚言でないを辯護されても、收支の間に莫大な差異があつて其の由來を明かにしてない生計調査であるから、決して確實とは云へない。故に調査の主體か、調査員自身かの何れか甚だしく不確實なるものである。

次に調査の主體に就いて男女の別及年齢別が考へられて居ないのは大なる缺點である。尤も記入用紙には漠然と大小人の區別は「汽車の實例による」としてあるが¹⁵⁾整理された結果には夫れさへ利用されて居ない。大人換算數又は *quod* を示してない生計調査の不完全なる事は著者自らも認めて居られる様であるから多くを語るまい。唯此種の研究に少くも歴史的に尊重せらるべきエングルに對し「もとより私はエングルの人爲的方法には餘り感服しなかつた事でもあり」¹⁶⁾とあるがエングル以上の方法を示す事もしないで斯く云ふのは論者の謙讓の徳を傷くるのみで、他に何の効も無い。又「其缺點は凡て整理方面の方法で補ふ事とした」¹⁷⁾と云はるゝが結果は全々夫れを反證して居る。

五 調査の客體に就いて

調査の客體である収入と支出に關する著者の調査法にも種々の疑點がある。先づ収入調査に於て記入用紙には「財産より生ずる収入月額」「家族の収入月額」の欄が設けてあるが¹⁸⁾實際の調査の結

15) 158頁

16) 159頁

17) 159頁

18) 158頁

果を見ると夫等は何處かへ消失して單に本俸及加俸があるのみで其代り記入用紙にない住宅料と臨時手當が擧げられて居る、そして夫等の由來に就いては何等説明がないのは如何なる理由であらう。

調査の客體に關する最大缺陷は前にも云つた様に副収入が調べてない事である。而して是に對する著者の辯解は僅かに「教員の職務の本質より副収入があるべきものでなく又實際副収入ありとするも調査が不可能であるから中止した」¹⁹⁾と云ふのであるから餘りに薄弱で非科學的の理由である。若し副収入の調査が不可能であると始めから考へるのならば全々生計調査に手を出すべき筈のものでない。又調査の結果で夫れ程の大なる不足額のある事を知つたからには根據のない豫想なんぞを擧げて事實を隠し得るもので無い。

私の考では副収入の調査は決して不可能ではない。却て著者が支出調査に於てなされた様な化粧代、娛樂費、修養費等の如きを調ぶるよりは遙かに容易な事である。故に普通はそんな面倒な支出の細目は「其他」とか Sundry として概算に止めても収入の源を詳しく調査する事に骨折つて居るのである。私共は生計費目の輕重を誤つて判斷してはならぬ。

六 研究方法に就いて

著者が研究方法を非常に重ぜられて居るにも拘らず見逃しのならぬ缺點が少くない。今其主なるものだけ一二を擧げん。

(一) 著者が記入用紙を收入と支出との二つに全々分離したのは誤つた結果を來す原因の第一に私は算へるのである。元來調査の目的が各自の收入と支出の關係を示すのである以上は始めから殊更に其用紙を夫々分離區別して調査にとり懸るが如き方法を著者がとられた理由は次の如である。「用紙を區別したのは無記名主義を徹底せしめんが爲であつたから本來の目的に鑑み收支組合せの方法は全々避ける事とした²¹⁾」と云つて居られるが其すぐ前には「用紙は收入支出の二つに分るゝも在職校名、男女別、世帯主と否との別、家族の數の四項は両者に共通して居るから無記名とは云へ両者を組み合せ一組の調査を得る事は極めて容易である²²⁾」とあるから何だか要領が得られなくなる。兎に角、著者の信ぜらるゝ様に本調査は苟も誠意ある教員相手の事であるから強て無記名にされる必要はない筈である。若し調査員が秘密を嚴守する事を明示し又調査の一定時期に達した時には姓名記入の部分で切斷し得る用紙を用ひたならば却て良結果を來し得るものと私は信ずるものである。

併し若し事情必要ありと認むる時は單に姓名の頭假名を記入するとか又は無記名にしても收支を正確に組合せ得る方法を採らねばならぬ、然らざれば生計調査で禁物となつて居る「調査後の事實の修正」を必要とする様になり甚だ不自然な人爲的結果を生ずるに至るのである。

(二) 調査方法としては私は寧ろ Median 式に依らず Mode 式に依りて Average を得るのを目的とし千二百名の教員中より代表的家族——例へば家族の員數は四人乃至七人(大人二——三人、十四歳以下の小供二——四人)、社會的及經濟的的狀態に於て甚しく異常でないもの等——に就いて

21) 161頁

22) 161頁

小數、例へば五十家族乃至百家族位を注意して選擇し豫め記入法其他必要なる訓練を與へた後記帳式方法によりて調査を行つたならば、勞少くして遙かに良効果が得られたと思ふ。然るに著者がなされた様に千二百人の多數に對して甚だしく複雑したる項目に亘り僅か一ヶ月間（何故に十一月を選ばれたか不解）を限り其月末十日間で文書によりて尋問様式で調査するが如きは恐らくは何人と雖ども不可能の事であらう若しかゝる方法で著者の如く自信の出来る生計調査が出来る云はるゝならば Booth, Brooks, Bücher, Hagmann, Chapin, Rowntree, Engel, More 等は口を揃へて自己の無能に泣き。英國の Board of trade, や U. S. Bureau of Labor Statistics 等の生計調査局は凡て不必要になり解散せざるを得ないであらう。著者は調査の長所の一として大量を擧げて居られる「千二百と云ふ數は可なりの大數であつて大量觀察の目的を達するには不足がなからうと思ふ」²⁴⁾勿論數の大なる事は望ましいのであるが不完全な大數よりも完全に近い少數の方が尊いのである、斯くて Mode の必要が起る。私はラブラーの研究は古いが著者が Intensive method 迄も古いと云はれる理由が解されない。元來正確に Intensive とか Extensive とかの方法を區別し得るものでないから事情の相異によつて適當な方法を探るべきである。

七 整理方法に就いて

著者は生計費全體の整理を行ふにガルトン法を用いたのであると云はれて居る様であるが夫れは全々誤りである。著者がガルトン法を用ひられたのは單に收支の各項目の計算だけの事で其結

果の組合せをして第四表を作られたのは著者自身獨特の方法に依られたのであるから、責任はガルトンでなく矢張り著者にある。私は各項目に就いてガルトン法を用ひるの可否に就いても意見を有して居るが今問題にしない。

ガルトンが人體測定に此方法を用ひて遺傳の研究をして以來、既に人口統計、賃銀統計、人身構造學統計、價格統計等にも利用されて居る事は ²⁶⁾ Nick 其他で承知して居るから各項目別々の整理に是れを用ひられた事は別に異存を申立てない。但人體測定の如きでない頗る複雑で變化し易い生計費全體の整理法に是れを用ひたと云はるゝのは理解し得ないのである。「收入と支出とを組合す事も出来なければ、又家族の消費力の單位 *quæ* を算定し得ないとなれば、茲に整理は行詰るのである。然し又自ら方法もある、結局 Galton's method によつたのである」²⁷⁾と迄に重きを置かれたのが事實とすれば夫れはガルトン法の濫用ではあるまいか。若し夫れ著者が行はれた様な整理法——即ち各個人に就き其收入の項目と支出の各費目を悉く別々に最高より最低に大小に應じて順次に配列したものから「圖表法」に依り夫々九階級に分ち其 Median を求め同一階級に屬するものを(他の事情は少しも顧みずして)夫々人工的に組合せを行ひ、以て夫れを生活標準の九階級と斷定されたが如き分類法を探らるゝならば、其理論的結論として次の様な誤まつた獨斷を下さねばならぬ事になる。是れが著者の全論文に對して致命傷になるのは蓋し當然の結果であらう。「彼等の消費生活に差異ありとすれば其收入關係と、年齢、配遇者、子供と云ふが如き身分關係とが、其因でなければならぬ、併かも是等の身分關係を示す數字は收入關係を示す數字と平行す

26) Zizek : Statistical Average, pp. 215-221

27) 161頁

るものであるから、収入、年齢、家族数を組合せて諸階級を作り、各階級の消費状態を調べれば生計調査の目的は貫徹されるのである。普通は所得の函数としての消費状態を調べるのを生計調査の目的として居るが、私は収入、年齢、家族数の凡てを合したものを一體とし、是等凡てのもの、函数としての消費状態を調べたのである。是れ一は調査上の便宜に出でたのであるが他方はそれが人間の自然に適つて居るからである。在職年限が長くなれば年齢も加はり収入も増し配偶者も出来れば子供も増す、是等の関係を渾一不可分の物として階級を作り各自の消費状態を調べたのが私の方法である。²⁸⁾」

京都小學教員の生活に同質性の富んで居る事は私も是れを認むるのであるが是れは程度問題である。「若し彼等の消費生活に差異ありとすれば其収入と身分關係とが其因でなければならぬ」と云はるゝのは大體に於て正しいが、夫等の關係は非常に複雑して居るから決して無條件で夫等の數字が互に「平行」するものであると斷定を下すのは餘りに無謀である。今日の經濟生活は所得の大小によりて最も大なる影響を受けるのであるから生計調査の目的は一方に於て消費者の所得と身分關係、他方に於ては支出狀態の關係を知らんとするのである、若し身分關係を表す數字と収入關係を示す數字と平行して居る事が始めから知れて居るのなら、何も面倒な調査を行はないでエンゲルの向ふを張りて「汐見法則」と特筆大書して明白に次の様な法則を確立し我等研究者に新しい指針を示さるべきである。即ち

第一則 一家の収入の増加に伴ふて小學教員は必ず配偶者を得。子供の數、年齢、及在職年限

は皆夫々收入に比例して増加するもので、其相互關係は渾一不可分である。

第二則 一家の收入の増加に伴ふて、小學教員の副収入は必ず收入に比例して増加し、且(又は)彼等が其消費事實を誇張する(即ち虚言をつく)程度も次第に増加するものである。

是等の驚く可き法則は凡て同論文一六五——一六八頁に掲げてある詳細なる圖表から立證し得るのである。尤も第二則に關する數字は何故か右圖表に示してないが、私が計算すると次の如くである。

京都小學教員一ヶ月(十一月)收入支出比較表

	第一級	第二級	第三級	第四級	第五級 中立級	第六級	第七級	第八級	第九級
收 入	(圓) 四二・五	五二・〇	五七・〇	五九・〇	六二・〇	六九・〇	七五・〇	八二・五	九二・五
支 出	(圓) 九〇・五	七六・五	八五・五	九五・五	一〇五・〇	一三六・〇	一六六・五	一八二・五	二〇〇・〇
差 額(實數)(圓)	二五・〇	二二・五	二六・五	二六・五	四〇・〇	四七・〇	五二・五	六〇・〇	七二・五
(不足額)(百分率)(%)	四八	三三・三	三三・三	三六・二	三六・五	四六・六	四八・八	五二・二	四六・六

蓋し之れ程著しい沒理は、學界に於て類が少いのであるから、私は是れ以上批評する勇氣を持たないのである。

八 結 論

要するに著者が本研究に於て誤つた調査法を採られたのであるから、不正當な出發點から不正當な結果に到達し、不幸にして其研究の目的を充分に達せられなかつたのである。若し前に掲げ

る様な「汐見法則」が存在して居るならば「賃銀鐵則」論者は定めし喜ぶであらうが時代の常識で考へても到底あり得べからざる事である。

斯くの如き結果に到達する論文を著者自身は少しも訝まないで、或はロートリーのヨーク研究に比したり或は「(本調査の)價值多きは云ふ迄もない」²⁹⁾或は「此研究方法こそ我國に最も適切なものである」³¹⁾と自賛して止まれないのは實に不思議の感に打たるものであるが是れ全く研究方法殊に統計學上の數式や數字を重んずるの餘り其研究に何等の目標も定めず、其目的を輕視する者が當然陷る可き窮境である。私は其犠牲者になられた著者に同情を有すると同時に、一般生計費研究者が自ら警戒す可き好個の實例を示された事を著者に感謝する。

「惡しき統計はなきよりも惡しきものである」と云ふのは實に此種の研究に於て其眞理を知るのである。斯く云ふものゝ我國現在の事情では此方面に正確な數字を得る事は非常に困難である、而して「統計の價値は先第一に數字の正確なる事にある」³²⁾のであるから不正確な數字を用ひながら其數字によりて餘りに込入つた數式や圖表製作に精力を用ひ過して不自然な判斷を下すのは恐る可き事である。勿論私自身も屢々不完全とは知りながら統計を用ひ、少數點以下の數字迄出して、出来るだけ數字の正確を期して論究する事があるが、夫れは決して數學的に正確なものとして無條件に用ふるのではなく、唯大體の傾向を示す爲めに其一手段として用ひるに過ぎないのである。要するに「常に結果を其(結果)を生ぜし原因に比較すべし」³³⁾との金言を守つて研究を進めなければ凡ての勞力が徒勞に歸し、經濟學徒が甚しき非經濟的の人間となり、却て社會の進歩を害す

29) 157頁

30) 157頁

31) 171頁

32) King : Statistics, p. 33.

33) Certillon : Cours Elementaire de Statistique, 54.

るが如き結果を生ずるに至るのである。(大正十年一月二十日)

獨著者が同論文の緒言に於て私に批評を加へられた事に關しても詳細に論議しようと思ふたが餘りに長くなるから今は其時を有して居ない。幸ひ其批評の要點は私の論旨には餘り重大でないものであるから、茲に其當時直ちに執筆した私の答書を其儘附記する事にした。而して夫以上に必要なる事は近々發表せんとして居る論文「生活の世界化」に於て更に御答をする事にする。

附記 (汐見二郎氏宛)

經濟論叢を御送り下さいまして有難う御座いました。小學教員の生計調査を行はれた事は學界の爲に眞に嬉しく思つて居ります。時を得次第精讀して種々御教へを受け度いと楽しみにして居ります。此度私が二ヶ年半許り前に試みた研究に對して御批評下さいました事を感謝致します。十分に御答へするものが禮でありませうが本日社會政策學會に出演の爲に上京するので唯今時がありませんから失禮ですが大急ぎに大要だけ御答へ致します。斯る批評を受けて其儘にして置いては同學の士に誤解を與へますから貴論文の續篇の可然所にでも此全文を掲げて下さる事を希望します一、御批評下さいましたあの研究は、一昨年即ち大正七年七月頃に大部分を纏めて十月頃に筆を加へ十二月の大會に發表したものであります。(社會政策學會報の出版は昨年の暮れでありましたが)從て其當時最近の主税局統計書(彙報にあらず)を用ゐたのであります。故に「大正七年度の數字は立派に印刷されて現に私の手元にある、大正八年の數字も主税局で調ばつて居る筈である」この御説は無理な注文ではありますまいか。

二、此種の研究に役立つ材料としては、不幸にして第三種所得稅統計の他にはありません。不完全な事は承知して居ましたが、夫れに依つて大體の傾向を示したまでです。所得の申告が内輪である事は一説ですが、自分が反證するの材料を有しない限り、當局の統計を信用して其數字を用ひるのは止を得ない事と思ひます。

三、第二種所得は統計書には所得額で分類してありませんから私の資料とする事が出来ません。併し此所得を第三種所得に比較するに決してあなたの云はれる様に「莫大」なものではありません。そして其數を總戸數で除するのでありますからエラーは餘り多くはありません。

四、東京市の生活標準で日本全國の標準を論じたのは勿論條件附でありました。其事は拙著「日本生活の標準」「生活問題」「生活經濟の新能率」其他關係の論文で繰り返し斷つて置いた筈です。「無條件」とか「正直に數字を信頼する」と斷定されたのは何を根據とされたのでありますかしらん。例へば貳千圓と云ふ數字が出て、それを特に壹千圓乃至參千圓として計算して居るではありませんか。

要するに御存じの通り生活標準問題を其性質が數學的に正確に論斷すべからざるものが多いのであり、加ふるに我國では一般に眞の研究資料が殆んど缺けて居るのですから何か纏めんとするは随分困難な事で多少獨斷的になるのは止むを得ないと思ひます。例へば私が約貳千圓といふ數字を出すには三ヶ年間苦心をしました、然かも其結果は數學的に正確なものではありませんが tentative のものとして發表するのは、此方面の學界で許された事で、此種の試みが多數に出來て始めて學界の進歩を期し得るものと思ひます。最近米國で發表した「Tentative quantity-cost budget necessary to maintain family of five...」の如きは數學的に不正確のもので、幼稚な消費經濟界を益する事大なるものと信じます。申すまでもなく私の論文には色々の缺點がある事を知つて居ますから、其後も引き続き研究に従事して居る次第であります。只斯る問題の草分け任務を幾分でも仕度いと思つて發表したに過ぎません、そしてより以上の研究が諸賢から續出せん事を希望して居るのであります。(大正九年十二月十五日)